教職課程センター紀要　第5号　(13)-(22)ページ、二〇二〇年一二月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.5 (13)-(22), 2020

研究ノート

塚本哲三の前半生と有朋堂―教育史と出版史の間―

The First Half of Tetsuzo Tsukamoto's Life and Yuhodo Shoten

―From the Historical Viewpoints of Education and Publishing

佐藤　裕亮
Yusuke, SATO

キーワード：受験参考書、レファレンスブック、国語、塚本哲三、有朋堂書店
Reference book, Japanese language teaching, Tsukamoto Tetsuzo, Yuhodo Shoten

はじめに

戦前期の国語科教科書に関する研究蓄積は厚く、教科書の内容・収録作品についても、早くから、国立教育研究所附属教育図書館編『国定教科書内容索引―国定教科書内容の変遷 尋常科修身・国語・唱歌篇―』や田坂文穂編『旧制中等教育国語科教科書内容索引』などの索引が編まれ(1)、近年では、作品名や作品著者名などから検索が可能な「東書文庫」の蔵書検索や、「国立国会図書館デジタルコレクション」などの情報源も整備され、比較的容易に検索が可能になっている。

一方、国語の受験参考書に言及したものとしては、野地潤家「国語解釈法の史的展開」があり(2)、近年の教育史研究の中には、菅原亮芳編『受験・進学・学校―近代日本教育雑誌にみる情報の研究―』(3)のように、メディアそのものを研究の対象として捉えようという動きも認められるし(4)、清田昌弘「戦前の受験雑誌にみる出版事情―その広告媒体を利用した鈴木一平の戦略―」のように、出版史の側から受験雑誌や学習参考書とその広告に言及したものもある(5)。しかし全体を見渡せば、受験参考書に注目した研究はけして多いとはいえず、その基盤となるべき、研究機関や図書館による蒐書もまた十分ではない。この方面の考察を一層進展させていくためには、大正・昭和期の受験参考書を史料として捉え、継続的にその重要性や面白さを広く伝えていくことで、収集・保存・活用の意義を確認していく、地道な積み重ねが必要になる。

筆者は、『現代文解釈法』について「解説」を記すよう求められて以来、この方面の研究動向に関心を寄せ続けてきた(6)。論創社による復刊は、既刊の『現代文解釈法』のほかに、『国文解釈法』と『漢文解釈法』についても企画されたが、残念ながら、今のところ刊行には至っていない。だが、両書を読み返す中で得られた若干の知見も存するし、『現代文解釈法』に寄せた「解説」中に言及できなかった資料や伝記的事項についても、なんらかの形で補う必要があるように感じていた。

そこで本稿では、以上のような問題意識を背景に、塚本哲三と有朋堂がその初期に手がけた『諸官立学校入学試験国語問題釈義』(以下『国語問題釈義』という)

と『諸官立学校入学試験漢文問題釈義』（以下『漢文問題釈義』という）に注目し、両書刊行に至るまでの塚本哲三の事績と有朋堂との関係を確認していくことで、両者に著者と版元の関係が兆した時期の様子を素描していく。必ずしもそれは、教育史研究や出版史研究に大きな成果をもたらすものではないかもしれないが、二つの領域に架橋する試みとして、一定の意義を有するのではないかと考えている。

一　国語問題釈義と漢文問題釈義

受験参考書がその形をととのえたのは、一般に、明治四三（一九一〇）年ごろといわれている[7]。中学卒業生数の急増と上級学校進学への競争激化をうけて、出版界でも学生のための学習参考書として、あるいは、上級学校受験のための受験参考書として用いられることを想定した、夥しい数の出版物が企画・刊行されていった。

本稿で取り上げる塚本哲三もまた、このころに受験参考書の編著者として、世に知られるようになった人物のひとりである。その彼が、最初に手がけた受験参考書とみられるのが、明治四三（一九一〇）年五月から六月にかけて刊行された『国語問題釈義』と『漢文問題釈義』であった。まずは両書の構成について確認しておきたい。

両書はその書名が示すように、当時の官立学校の入試問題を解説した受験参考書で、このうち『国語問題釈義』は「解釈之部」と「文法之部」を立て、

大学予科及各地高等学校
各地高等工業学校（東京、大阪、仙台、熊本、名古屋）
各地高等商業学校（東京、神戸、長崎、山口）
各地高等農学校（東北、盛岡、札幌、実科）
水産講習所
各地医学専門学校（千葉、仙台、金沢、長崎）
海軍兵学校
海軍機関学校
陸軍士官候補生
男女高等師範学校
東京外国語学校
専門学校入学者検定試験[8]

などの校種ごとに問題を掲げ、解答や参考（解説）を記している。一方、『漢文問題釈義』には「解釈之部」「文法の部」のような部立てはみられないが、『国語問題釈義』と同様に、校種ごとに問題を掲げ解答等を示している[9]。

この二冊の参考書は受験生の支持を得て、その後も入試問題等の増補と価格の改定を伴いつつ版を重ねていった。現在、国立国会図書館が所蔵する明治四三（一九一〇）年五月発行の『国語問題釈義』と明治四三（一九一〇）年六月発行の『漢文問題釈義』の奥付によれば、いずれも定価は五拾銭であったというが、大正二（一九一三）年九月発行『精説国漢文要義』の巻末に掲げられた広告を見るに、

立教大学講師塚本哲三先生編
国語問題釈義　全一冊／定価金五十五銭／郵税金六銭
同
漢文問題釈義　全一冊／定価金五十五銭／郵税金六銭
最近十年間の各官立学校入試問題を網羅し解釈的確懇切を極む発行以来大いに受験者の好評を博せるもの也[10]

と記されていることから、この間、僅かながら価格の上昇があったことがわかる。また、『朝日新聞』に掲載された広告①～③からも同様に、内容の増補や価格改定が行われていたことが確認できる。

①『朝日新聞』大正三（一九一四）年四月一七日、東京、朝刊、一面広告
受験者の一大福音
▽電本一一三六・四四二五／振替東京七一四八　東京／神田　有朋堂
立教大学講師　塚本哲三先生編著〔第十一版発行〕
諸官立学校／入学試験　国語問題釈義　各一冊四六版／紙数各五百頁
諸官立学校／入学試験　漢文問題釈義　正価各六拾銭／送料各八銭
増補　一　自明治三十五年／至大正二年／最近十二年間の問題を網羅す

改訂　一　新に語句熟語の総索引を付し研鑽に便ず
　　一　解答の的確懇到なる事夙に世に定評あり[11]

②『朝日新聞』大正六（一九一七）年三月一四日、東京、朝刊、一面広告
▼塚本哲三先生著▲
漢文解釈法［略］
国文解釈法［略］
最近十五年　国語問題釈義　全一冊／正価金七十銭／送料金八銭
最近十五年　漢文問題釈義　全一冊／正価金七十銭／送料金八銭
［以下略］[12]

③『朝日新聞』大正七（一九一八）年四月二一日、東京、朝刊、一面広告
塚本哲三先生著
国文解釈法　全一冊／総布美本／正価金八十銭／送料金八銭
漢文解釈法　全一冊／総布美本／正価金八十銭／送料金八銭
諸官立学校入学試験　国語問題釈義　全一冊／正価八十銭／送料金八銭
諸官立学校入学試験　漢文問題釈義　全一冊／正価八十銭／送料金八銭
其用意の懇切に於て、其解釈の徹底に於て、四著夙に学生界に定評あり。敢て本書の熟読翫味を世の受験者諸君並に在学者諸君に勧む［以下略］[13]

各地の図書館には、その後五か年間分を増補したものとみられる、塚本哲三『諸官立学校入学試験国語問題釈義―自明治三十五年度至大正五年度最近十五年間―』（有朋堂、一九一六年）や、『国語問題釈義』と『漢文問題釈義』を合冊した『国漢文問題釈義』訂正版（有朋堂、一九一九年）などが、現在も所蔵されており[14]、内容の増補や価格の改定を伴いながら世に流布していった様子がうかがえる。
なお、『国漢文問題釈義』が『国語問題釈義』と『漢文問題釈義』の後継であることについては、④と⑤の広告からも確認できる。

④『朝日新聞』大正七（一九一八）年九月二四日、東京、朝刊、一面広告
碧峯　妻木忠太先生著（（最新刊））
最新　東洋歴史解釈　《全一冊》［略］
塚本哲三先生著（（最新刊））
国漢文問題釈義　《全一冊》
▲四六判六百余頁・正価金一円二十銭　送料金八銭
先生の前著『国語問題釈義』『漢文問題釈義』を合して一冊とし、解答、参考、注意の各項に渉りて根本的改訂を加へ、大正六七年両年度の分を増補せる新著にして、最近十一ヶ年間の問題を網羅し、精解精説至らざるなし。
碧峯　妻木忠太先生著
最新　日本歴史解釈［略］
改訂増補　維新後大年表［略］
東京高等商業学校教授　木村重治先生著
増補改訂　西洋史眼［略］
熊田葦城先生著
幕府瓦解史［略］
塚本哲三先生著
国文解釈法／全一冊総布美本／正価金九十銭／送料金八銭
漢文解釈法／全一冊総布美本／正価金九十銭／送料金八銭
［以下略］[15]。

⑤『朝日新聞』大正九（一九二〇）年一〇月二八日、東京、朝刊、一面広告
国漢文問題釈義
塚本哲三先生著・全一冊・四六判総布五百八十八頁／正価金一円三十銭・送料金十二銭
受験者は必ず過去数年間の入試問題を総覧して其程度と傾向とを察せざるべからず。これ受験必勝の最も平凡にして又最も安全なる二大準備也。
本書は明治四十一年度以降の入試問題を其出題形式のまゝに網羅して上欄となし、下欄に於て之が模範的答案と学習受験に関する適切なる注意とを与へたるもの、上記二著［『国文解釈法』と『漢文解釈法』］と相俟つて正に受験界の三大要典を為すもの也[16]。

明治の末から大正の初めにかけて、受験競争は年々激しさを増していき、出版社もまた年を追うごとに増大する需要に応えるべく、さまざまな受験参考書を編

集・刊行し、世に送り出していった。『国語問題釈義』と『漢文問題釈義』については、高等教育機関の入学試験に現代文が頻出するようになる大正一〇年頃には、ひとまずその役割を終えたとみられるが、相前後して塚本は、『国語解釈法』『漢文解釈法』『現代文解釈法』など数々の参考書を世に送り出し、大正から昭和戦前期を経て一九五〇年代までの間、受験参考書の著者として認知を受け続けた。

戦後、昭和二七（一九五二）年に刊行された「アサヒグラフ」一四七三号の「告知板　受験参考書ベストセラー著者」には、小野圭次郎、沼野井春雄、吉岡力、岩切晴二、豊田浩七、芳賀幸四郎らと並んで塚本哲三が次のように紹介されている。

静岡県生、浜松中学三年で中退、その後は独学、二十八歳の時に上京、立教中学に奉職した（中略）「国語解釈法」初版は大正五年、戦後新仮名遣いで内容も改め、「完修国文解釈法」となつたが、通して九六〇版、百万内外である。現在出ている参考書だけでも「基本漢文解釈法」ほか二十点位。売れた理由は？……生徒の立場になつて、これで解るかしらと、易しく丁寧に書くからでしょう。原文と解釈との間が有機的につながつていることだけは自慢できます。――解釈とは原文の再現芸術で「脚本をこなす役者の演技」だという。「考え方」はこの基本的態度で、近くまた漢文に通用して新著をだす予定。「アメリカ流の教育理論に合せて書いた参考書はだめで」、試験問題がいくら変つても実力のつけ方には変りない。逆コースとしてでなく日本の古典的教養として漢文を勧める。現在も八時間ずつ三日予備校で教鞭をとつて元気一杯[17]。

塚本は、明治四三（一九一〇）年の『国語問題釈義』『漢文問題釈義』刊行以降、しだいに学校教師としての立場から離れ、予備校講師、著者・編集者の道を歩み始める。そのあたりの経緯について、彼自身が記した随筆を参照しながら、もう少し立体的に捉え直してみたい。

二　『聖戦閑話』にみる塚本哲三の前半生

塚本哲三の伝記材料については、『大衆人事録』などの名鑑に掲載された情報のほかに[18]、有朋堂の創業者・三浦理の追悼文集『三浦理君追想録』や、塚本自身が講習会の席上や『日刊受験研究』誌上で語り記したものを整理した随筆集『聖戦閑話』がある[19]。その一部については、すでに『現代文解釈法』の解説でも言及したが、本稿ではあらためて、先に掲げたような資料に基づきながら、塚本が受験参考書を手がけるようになるまでの経緯を整理しておきたい。

まずは『聖戦閑話』に基づきながら、出生から明治四一（一九〇八）年に立教中学の教諭となるまでの歩みを紹介しておこう。

明治一四（一八八一）年一二月、静岡県小笠郡堀内という駅から一里半離れた村落の農家に生まれた哲三は、その村の小さな寺の住持であった塚本哲英の養子として育った。尋常小学校・高等小学校を終えたのち、編入試験を受けて浜松中学校で学ぶが中途退学し、しばらくの間、出身の高等小学校で教鞭を執っている。

二一歳の冬、帝国教育会の国漢文中等教員講習会に入会するために姉を頼って上京したが、聴講は「読む事がすきで喋べる事がすきで、黙つて聴いてゐる事の出来ぬ私の我儘な性分」から、一か月ほどで止めてしまう。その後、神田の和泉小学校や京橋の文海小学校で教えたが、自身の病気や姉の死去が重なり、病気療養のため、兄の婿入り先を頼って再び静岡へと戻った。

半年ほど療養したのち、塚本は、焼津の東益津小学校の教壇に立つが、二五歳の秋にふたたび上京。麻布の南山小学校で英語の教員として働く傍ら国民英学会に通い、伊藤先生（浜松中学時代の恩師、伊藤太郎のことであろう）の紹介で埼玉県の熊谷中学校に転じた。二六歳のとき中等教員国語漢文試験に合格、熊谷中学校や山口県の岩国中学校で教えたが、明治四一（一九〇八）年、二八歳のときに立教中学校へと転任し、再び東京へ戻る。その際の事情について塚本は、『聖戦閑話』所収「自分を語る」の中で次のように記している。

岩国中学の校長は浜中時代の校長杉田平四郎先生で、多少同僚の先生方から誤解を受けたかと思ふ位に信任されたものである。その現はれの一つは、全然私の考に一任しての新寄宿舎の創設的経営であつた。だが当時の私はその知遇に報いてゆつくり寄宿舎の創設を進めて行くには野心と懊悩とが多過ぎた。斯くして遂に杉田校長に負いて二十八の秋東京の立教中学に転じて了つた。その直接の動機は、当時三中の先生であつた伊藤先生が早大の勝俣教授と提携して有朋堂から刊行すべく計画されてゐた英語辞書のお手伝をする事であつた。

立教へ来てからの私は色々な先生の御親交を受けた。中にも本荘季彦先生や古賀友太先生などはその最なるものであるが、殊更深く相結んで今日に及んでゐるのは考へ方の藤森良蔵先生である[20]。

岩国中学校を辞め立教中学校へと移り、本荘季彦（掬水）、古賀友太、藤森良蔵と出会ったことは、塚本にひとつの転機をもたらした。なかでも、明治四三（一九一〇）年に『幾何学考へ方と解き方』を刊行し、以来「考へ方主義」を掲げて、受験界に大きな一歩を踏み出すことになる藤森との邂逅は、塚本のその後の人生に大きな影響を与えていくことになる。

大正四（一九一五）年から始まった「日土講習会」、大正六（一九一七）年の雑誌『考へ方』創刊（主幹：藤森良蔵、編輯主任：塚本哲三）、「考へ方研究社」の立ち上げと関連する参考書の出版、具体的には、塚本哲三『漢文の学び方考へ方解き方』（考へ方研究社、一九一九年）、同『国文の学び方考へ方と解き方』（考へ方研究社、一九二〇年）などの刊行は、いずれも、両者の関係の深さを示している[21]。

三　勝俣銓吉郎の辞書編纂を手伝う

中学の一教師であった塚本哲三が、受験参考書や学習参考書の編著者として、日本文学の一大叢書として知られる「有朋堂文庫」や中国の古典や江戸の漢文作品を収めた「漢文叢書」の編集者として、出版史上に大きな足跡を残す契機をもたらしたのが、有朋堂とその創業者・三浦理であることは、言を俟たない。

三浦理は、明治五（一八七二）年九月に静岡は掛川太田藩の藩士三浦正幹の次男として生まれ、九歳で浜松の商店店員となったのち、明治一六（一八八三）年、一一歳のとき三省堂に入社、その後一八年間、同社に勤務した。

明治三四（一九〇一）年に独立して、神田錦町に有朋堂を創業。当初は三省堂の辞書や教科書の取次販売をしつつ、しだいに出版事業へと乗り出していった。明治三五（一九〇二）年には、樺正董『数学綱要』代数学・三角法之部および『同』算術・幾何学之部を刊行し[22]、以来、佐々木文美『英語作文教本』南日恒太郎『和文英訳法』『英文解釈法』、山下安太郎、帰山信順による『化学解義』や『物理学解義』などの参考書を手がけている。その有朋堂が、辞書編纂に取り組みはじめたのは、明治四二（一九〇九）年一二月に刊行された、神田乃武・南日恒太郎共編『英和双解熟語大辞典』以降のことである[23]。

前節で紹介した「自分を語る」にみえる、早稲田大学の「勝俣教授」というのは勝俣銓吉郎のことだろう。理論よりも実用を重視し、「いかに英語を使いこなすか」ということを目標に置いた勝俣は、徹底的な用例採取を礎に、その生涯を通じて多くの辞典を編纂しているが、なかでも、昭和一四（一九三九）年に研究社から刊行された『英和活用大辞典』は、コロケーション辞典の先駆として、英語辞書編纂史上に大きな足跡を残すと同時に、勝俣の業績を代表するものとしても知られている。

さて、勝俣銓吉郎と有朋堂との関係はいつごろより兆したものであったのだろうか。出来成訓「英学者勝俣銓吉郎」の稿末に掲げられた「勝俣銓吉郎著作目録」によれば、有朋堂と勝俣との関わりは、明治三八（一九〇五）年の『英語倶楽部』刊行まで遡るという[24]。以降、明治三九（一九〇六）年に『名家尺牘集』『三大文豪』『探偵奇談』を手がけ、明治四〇（一九〇七）年には西洋笑話集の対訳『西洋柳樽』を刊行しているが、より重要なのは、先に紹介した神田乃武・南日恒太郎共編『英和双解熟語大辞典』の編纂にあたり、勝俣が三年を費やして初案の作成や材料蒐集、配列の考案を行った点であろう。この時の経験は、有朋堂から刊行された、『英和例解要語大辞典』（一九一一年、上巻のみ）、『英和根底三千句』（大正六）、『英和活用五千句』（一九二〇年）を経て、勝俣英語学の集大成ともいうべき『英和活用大辞典』に活かされていくことになる[25]。

この過程で、塚本がどのように関わっていたのかは必ずしも詳らかではないが、伊藤太郎との縁で勝俣の辞書を手伝ったことは、『三浦理君追想録』に収められている「太く短かかつた君の一生」の中で、次のように記されている。

僕が三浦君と知るやうになつたのは、明治四十一年の秋、旧師伊藤太郎先生と勝俣銓吉郎氏とが特殊の英和字典を作られる計画の一部をお手伝いした時に始まる。その秋僕は山口県岩国中学を辞して、立教中学の先生になつて上京したのであつた。年は二十八だつたが、其の頃の僕はばかに若く見えたものだ。正に一介白面の書生といふ風だつた。学問といつた所で、経験といつた所で、僅かに文検の国漢が通つて中学教師として只の三年、それでも当時の編輯長といふか、ひどく威張つてゐた永井君の知る所となつて、自然三浦君からもかなり厚遇された[26]。

塚本が勝俣銓吉郎の辞書を手伝った時期は、明治四一（一九〇八）年のことである。その辞書が『英和双解熟語大辞典』であったのか、それとも、『英和例解要語大辞典』であったのかは、先の記述からは判然としないが、この仕事を通じて塚本は、有朋堂の三浦理や永井太三郎との関係を深めていくことになるのである。

四　藤井乙男編『諺語大辞典』の分類索引を考案

塚本と有朋堂との関係を考える上で、より重要と思われるものに、わが国の近代的な「ことわざ辞典」の嚆矢ともいえる、藤井乙男編『諺語大辞典』編集・刊行事業がある。この辞書と塚本哲三とのかかわりは、『三浦理君追想録』所収「太く短かかつた君の一生」の中で言及されているので、まずはその記述を確認しておきたい。

そして僕の饒舌が禍をなしたといふか幸をなしたといふか、その翌四十二年には諺語大辞典の索引を引受けさせられた。引受けたのではない、引受けさせられたのである。十二月も大分迫つてからやつと索引が纏つて、三浦君と一緒に京都に行つた。京大へ赴任されたばかりの藤井博士にお目に懸つて、柊屋でその原稿をお目に懸けた。僕は車に乗せられて、京都見物に廻る事になつた。索引に対してひどいお小言でも出ては僕に気の毒だといふ三浦君の心尽しからだつたと思ふ。所が大体に於てその索引は著者藤井博士の心からの喜びを得たらしい。三浦君と僕との間が深く結びつけられたのも、その索引に起因すると信ずる[27]。

『諺語大辞典』の編著者「藤井博士」は、俗諺（ことわざ）や近世文学の研究で知られる藤井乙男（紫影）のことである。「藤井乙男先生御年譜」によれば、彼は、明治元（一八六八）年七月に兵庫県津名郡洲本町（淡路島）に生まれ、明治二七（一八九四）年七月、東京帝国大学文科大学国文学科を卒業すると、同年一〇月に尋常中学修猷館教諭、明治三一（一八九八）年には第四高等学校教授となった[28]。この間、明治二九（一八九六）年に知友の草野清民との共編で『帝国大辞典』を三省堂から刊行するとともに[29]、『新編国文読本』や『新撰帝国小史』などの教科書を積善館から上梓している。

石川の第四高等学校に転じてからの藤井は、岩城準太郎の「藤井乙男先生の学殖と著作」に、

当時先生は既に俗諺の蒐集と研究とに着手せられてゐた。俗諺の蒐集は、その完璧を期するとなると、事甚だ容易でなく、古今の典籍を渉猟して、恒砂の中から零碎の玉を拾はねばならぬ。先生はこの容易ならぬ仕事と取組んで、十余年の精根を傾け、更にこれに研究を加へて、明治三十九年「俗諺論」（昭和四年改版「諺の研究」）を著し、同四十三年「諺語大辞典」（収載事項三万余）の大著述を完成せられた。この書は、当時だけでなく今日においても比類を絶する名篇であつて、又実に先生が近世の群籍を渉猟せられる機縁となつたものである[30]。

とあるように、近世文学やことわざ（俚諺、俗諺）の研究に取り組んでいた。この間の著述についてみていくと、明治三七（一九〇四）年九月には、まず近松門左衛門の伝記や逸話、著作等を紹介した『近松門左衛門』が金港堂より刊行されている。明治三九（一九〇六）年には『俗諺論』を富山房より上梓しているが、この間の最大の成果と呼ぶべきものは、やはり、明治四三（一九一〇）年に刊行された『諺語大辞典』であろう。その編纂の経緯については、藤井自身が辞典の「緒言」に、

余が俗諺の蒐集に始めて著手せしは、明治三十年四月にして、筑前福岡なる修猷館に奉職せる時なりき。翌年九月、金沢の第四高等学校に転ずるに及び、同僚の学友武笠三君も、亦かねて此事業に著手せりしこととて、相謀りて協力事に当らんと約し、捜索の方面を分ち、各丶古書中の俚諺を収拾するに力めしが、其後武笠君は浦和に転じ、次で鹿児島に移り、遠く相離れて研究を共にするの便を缺くに至りぬ。三十八年十月、余は従来蒐集せる材料を応用して、まづ『俗諺論』（富山房発行）と題する小冊子を公にして、俗諺の性質功用を世に示し、且矻々として辞典の編纂に鞅掌せしに、武笠君余が苦心を諒とし、一朝筐中の資料を挙げて恵与せられしかば、愈丶勇気を鼓舞して、遂に今日の大成を見るに至れり。前後十三年に亘れる事業としては、真に眇然たるものなれども、公務の余暇、一人の助手をも使用せず、且絶えず持病

の「リウマチス」と闘ひつゝ、漸く完成するを得たるは、余の私に幸とする所なり[31]。

と記されているのが参考になる。これによれば、藤井がこの方面の研究に着手したのが、明治三四（一九〇一）年四月であったこと、当初は、同様の作業を進めていた武笠三[32]と連携・分担して作業を進めていたものの、武笠の異動に伴い共同研究が困難となったこと、藤井はそれまでに蒐集した資料に基づいて『俗諺論』を著し、ことわざ研究の意義を唱導するとともに、武笠からの資料提供も受けつつ辞典の編纂を継続、その成果が『諺語大辞典』に結実していったことがみえてくる。ただし、以上のような記述のうちに、塚本との関わりはあらわれてこない。

実際に『諺語大辞典』を捲っていくと、「緒言」の後に付された「五十音図索引」「仮字索引（かな索引）」・「字音索引」とは別に、意義や用法に基づく「分類索引」が巻末に付されていることに気づく。その例言には「本索引ハ、塚本哲三氏ノ考案ト労力トニヨリテ成レリ、記シテ感謝ノ意ヲ表ス」とあることから、この分類索引こそが、塚本のいう「引き受けさせられた」索引であったことが確認できる。

この塚本の考案にかかる索引については、「十分に使いこなすには多少の習熟を要する[33]」との評もあるが、『諺語大辞典』をレファレンスブックとして活用する際に、役立つものであることは疑いない。既知のことわざであれば、「五十音図索引」「仮字索引」「字音索引」を経ることはあるにせよ、基本的に五十音順に配列された見出し語を追い、ページを捲っていけば事足りる。しかし、未知のことばを探索したい場合、この方法は不便である。そのような時に、ことわざの意義・用法に着目した塚本の「分類索引」が役に立つ。そこに掲げられている「愛敬」「愛惜」「愛憎」から「賄賂」「我儘」「腕力」「綿」「和不和」に至るさまざまなキーワードを手がかりに、目的の言葉を探し出す、というように。のちに『諺語大辞典』を剽窃したとして訴えられることになる、中野吉平『俚諺大辞典』の場合も、見出し語の配列と索引に於いてはその特色を示そうと、「天文」「地理」「時令」「道徳」「宗教」「人事」「学芸」「身体」「器財」「経済」「宮室」「動植物」「飲食」「雑」の一四の部門のもとに五十音で配列し、巻末に「語順索引」を付している[34]。剽窃云々の話はひとまず措くとしても、従来の辞書との差別化を図るため、見出し項目の配列や索引について、さまざまな創意工夫が行われてきたことは、この二つの辞典の例からもうかがえる。

明治四二（一九〇九）年一二月、塚本の作成した索引は，藤井乙男の容れるところとなり、その成功は有朋堂の三浦理と塚本哲三との間を、より強く結びつけることとなったのである。

おわりに

岩国中学で教鞭をとっていた塚本哲三は立教中学に転ずると、浜松中学時代の恩師であった伊藤太郎の紹介で、有朋堂の英語辞書編纂を手伝うようになり、次いで『諺語大辞典』の索引作りに従事した。その仕事の中で兆した信頼関係と、人と人との結びつきが、その後の塚本の人生を決定づけていくことになる。その記念すべき第一歩が、「太く短かかつた君の一生」の中で塚本自身が、

車中――往き途か帰り途か覚えがないが、国語と漢文の入試問題解釈を作るといふ約束も成立して，二書共に四十三年に有朋同から出して貰ふ事になつた。それが僕の貧弱な著作事業の抑もの第一歩である[35]。

と述べているように、あの『国語問題釈義』と『漢文問題釈義』だったのである。以降、塚本は、有朋堂と前述の考へ方研究社からさまざま著述を世に送り出していく。その中には、大正二（一九一三）年に刊行された『精説国漢文要義』のように、藤井乙男の校閲を仰いだものもあった。

著者と版元の関係を軸に過去の出版物をみていくと、その周辺に広がる人と人との繋がりが浮き彫りになる。その一つひとつの糸を丁寧にときほぐしていくことで、従来の研究とは違った視角を得ることができるのではないか。本稿は、そのような問題意識に基づく一試論にすぎないが、この作業を通じて、塚本が中学教師から著者へと転じた直接・間接の契機については、ある程度明確になったと考えている。引き続き調査を進め、彼の仕事の全貌を把握する努力を継続していくことで、教育史と出版史の両面において、塚本哲三がどのような位置を占めるのか、考察を重ねていきたい。

(1) 国立教育研究所附属教育図書館編『国定教科書内容索引―国定教科書内容の変遷　尋常科修身・国語・唱歌篇―』（広池学園出版部、一九六六年）、田坂文穂編『旧制中等教育国語科教科書内容索引』（教科書研究センター、一九八四年）。

(2) 野地潤家「国語解釈法の史的展開」（『国語教育通史』共文社、一九七四年）初出：「国語」一二、徳島県高等学校教育研究会国語学会、一九七四年二月。同論文は明治から一九三〇年代に至るまでの国語解釈法の史的展開を概述したもので塚本哲三の『国文解釈法』と『現代文解釈法』にも言及する。

(3) 菅原亮芳編『受験・進学・学校―近代日本教育雑誌にみる情報の研究―』（学文社、二〇〇八年）。同書は研究編と資料編からなり、研究編の第一章では『受験と小学生』『受験と学生』『蛍雪時代』『受験界』『鉄道青年』、第二章では進学案内所に関する論考が収められ、資料編には「戦前日本における受験雑誌一覧および出版点数」と「近代日本における進学案内書の文献目録」が掲げられている。

(4) 教育史研究が、従来の近代学校中心史観を相対化させていこうとするなかで、「メディア（史）」の視点を取り入れていったことについては、宮坂朋幸「近代学校教育の相対化」（教育史学会編『教育史研究の最前線Ⅱ』六花出版、二〇一八年）五二～五九頁を参照。

(5) 清田昌弘「戦前の受験雑誌にみる出版事情―その広告媒体を利用した鈴木一平の戦略―」（『日本出版史料―制度・実態・人―』二、一九九六年八月）。

(6) 拙稿「塚本哲三の事績と『現代文解釈法』」（塚本哲三『現代文解釈法』論創社、二〇一七年）七三一～七四四頁。

(7) 板倉聖宣「受験参考書」（『世界大百科事典』一三、改訂新版、平凡社、二〇〇七年）。

(8) 塚本哲三編『諸官立学校入学試験国語問題釈義―自明治三十五年度至明治四十二年度―』（有朋堂、一九一〇年）。

(9) 塚本哲三編『諸官立学校入学試験国語問題釈義―自明治三十五年度至明治四十二年度―』（注八前掲書）、同編『諸官立学校入学試験漢文問題釈義―自明治三十五年度至明治四十二年度―』（有朋堂、一九一〇年）。

(10) 塚本哲三編『精説国漢文要義』（有朋堂、一九一三年）。

(11) 「朝日新聞」一九一四年四月一七日、朝刊、東京。

(12) 「朝日新聞」一九一七年三月一四日、朝刊、東京。

(13) 「朝日新聞」一九一八年四月二一日、朝刊、東京。

(14) 二〇二〇年八月現在、筆者がOPAC等で所蔵を確認できたものは以下の通り。①と②については国会図書館デジタルコレクションで提供されている一九一〇年のものが見やすいが、それ以降の増補を確認したい場合、各館の所蔵資料を直接確認していく必要がある。

①『諸官立学校入学試験国語問題釈義』：国立国会図書館（一九一〇年、デジタルデータあり）、秋田県立図書館（一九一五年）、同志社大学図書館（一九一六年）。

②『諸官立学校入学試験漢文問題釈義』：国立国会図書館（一九一〇年、デジタルデータあり）、大阪市立大学学術情報総合センター（一九一六年）、鎌倉女子大学図書館（一九一七年）、拓殖大学図書館（一九一七年）、同志社大学図書館（一九一六年）、長崎大学附属図書館（一九一六年）。

③『国漢文問題釈義』：石川県立図書館（一九一八年）、大阪府立図書館（不明）、昭和女子大学図書館（一九一八年）、名古屋市立鶴舞中央図書館（訂正版、一九一九年）。

(15) 「朝日新聞」一九一八年九月二四日、朝刊、東京。

(16) 「朝日新聞」一九二〇年一〇月二八日、朝刊、東京。

(17) 「告知板　受験参考書ベストセラー著者」（「アサヒグラフ」一四七三号、一九五二年一一月五日）二五頁。なお、同記事には塚本哲三の肖像（写真）も掲載されている。

(18) 『大衆人事録』第一四版、東京篇（帝国秘密探偵社、一九四二年）六四三頁、には現職について「有朋堂編輯顧問、日土講習会講師、考へ方研究者主任」とあり、閲歴として「静岡県岩澤源六の男明治十四年十二月三日生れ塚本哲英の養子となる浜松中学に学び中等教員国漢文科検定試験合格熊谷岩岡立教中学教諭立教大学教授講師有朋堂文庫編輯長等歴職大正四年現職就任『徒然草解釈』他数書の著書あり」と記されている。

(19) 塚本哲三「太く短かかつた君の一生」（永井太三郎・塚本哲三編『三浦理君追想録』私家版、一九二九年）、同「自分を語る」（『聖戦閑話』有朋堂、一九三八年）。

(20) 塚本哲三「自分を語る」（『聖戦閑話』注一九前掲書）。

(21) 藤森良蔵と塚本哲三の関係については、板倉聖宣「藤森良蔵と考え方研究社」（『かわりだねの科学者たち』仮説社、一九八七年）を参照。雑誌『考へ方』については、藤森良蔵『宣伝十二年―雑誌『考へ方』五周年紀年出版―』（考へ方研究社、一九二二年）も参考になる。

(22) 樺正董編『数学綱要』代数学・三角法之部（有朋堂、一九〇二年）および『同』算術・幾何学之部（有朋堂、一九〇二年）。なお「代数学・三角法之部」の緒言に「書肆有朋堂三浦理氏ハ嘗テ予ト最モ関係深キ書肆三省堂ノ店員ナリシ人ナリ此度新ニ書店ヲ開キタルヲ以テ予ハ祝意ヲ表スルタメニ嘗テ編タル数学綱要ヲ清書シ世ニ公ニスルノ権利ヲ附世スルヿトシタリ」とある。

(23) 有朋堂の辞書出版については、惣郷正明編『目で見る明治の辞書』（辞典協会、一九八九年）の中で簡潔に紹介されている。また、有朋堂が『英和双解熟語大辞典』の編纂に着手した背景について、鈴木省三は『日本の出版界を築いた人びと』（柏書房、一九八五年）の中で、「その企画は英語学界空前の大企画であった。莫大な経費がかかるのは必然で、しかも売れ行きは未知数であった。この大辞典の成否は有朋堂の興廃にかかわる大事業といってもよい。三浦が辞書出版の手始めに、なぜ比較的売れ行きの未知数なこの辞典を選んだのか。それは三浦理の商業道徳心に原因するものであった。永井らが著者の立場から、たびたび手ごろな「英和辞典」の出版をすすめたにもかかわらず、三浦理は頑としてこれに応じなかった。これは旧主三省堂書店亀井家に対する遠慮だったのである」と述べている。なお、同主旨の記述は、永井太三郎「三浦理君と私」（『三浦理君追想録』、注一九前掲書）にも見える。

(24) 『英語倶楽部―ABC club―』（有朋堂、一九〇五年）。同書は、教育勅語や君が代、宣戦詔勅、征露日記、日本五大嘶などを英和対訳した英語初学者の小冊子で、奥付によれば編纂兼発行者は有朋堂の三浦理。「朝日新聞」明治三八年八月二三日、朝刊、東京版、五面の新刊紹介にも、内容紹介と価格（正価金二十五銭）の記述はあるが編纂者の記載はない。喜安璡太郎「三浦理君を憶ふ」（『三浦理君追想録』、注一九前掲書）によれば、勝俣もまた有朋堂創業時の三浦の「相談相手」であったという。

(25) 勝俣銓吉郎『英和活用大辞典』の基盤が、神田乃武・南日恒太郎共編『英和双解熟語大辞典』編纂への貢献にあったことについては、土肥一夫「勝俣銓吉郎と連語」（「共通教育センター紀要」五、二〇一二年三月）を参照。

(26) 塚本哲三「太く短かかつた君の一生」（『三浦理君追想録』、注一九前掲書）三一五頁。

(27) 塚本哲三「太く短かかつた君の一生」（『三浦理君追想録』、注一九前掲書）三一五～三一六頁。

(28) 藤井乙男の事績に関する資料としては、「藤井乙男先生御年譜」「藤井乙男先生御著作年譜」（「国語国文」一五巻五号、一九四六年八月）、岩城準太郎「藤井乙男先生の学殖と著作」（「国文学―解釈と鑑賞―」一六巻一二号、一九五一年一二月）、『京都大学文学部五十年史』（京都大学文学部、一九五六年）二〇一～二〇二頁、藤井乙男『諺の研究』講談社学術文庫二四八（講談社、一九七八年）所収の浅田善二郎による「解説」と「著者年譜」などがある。

(29) 『帝国大辞典』については、三省堂の辞書編集者の一人として知られる、斎藤精輔の『辞書生活五十年史』Bibliophile series（図書出版社、一九九一年）に「余は漢和辞典の編纂に着手する以上は、国語辞書の編纂をも企てざるべからずと、亀井氏に勧説したるに、亀井氏いわく、余の親友明治堂主鈴木敬視氏、かつて余に向い、自分が版権を有する山田美妙斎氏の日本大辞典を売りたし、買収せられてはいかがと申し込みしことあるをもって、その書を買取り、これを基本として国語辞書を作成するもまた一策なるべしと。すなわち早速鈴木氏と交渉の結果、その版権を買取ることとなり、余の監督の下に、これが編纂に着手し、年余にしてこれを完成し、世に公にする事を得たり。「帝国大辞典」と称するものすなわちこれなり（中略）国語辞典の題字を時の文部大臣西園寺公望侯、序文を東宮御用掛本居豊穎氏および大学教授文学博士黒川直頼氏に依頼し、かつ藤井乙男氏と草野清吉氏とにその稿の校閲を乞い、明治二十九年十月藤井・草野両氏合著の名の下にこれを世に発表したり」（九四～九五頁）と記されており、『帝国大辞典』は版権買い取りにより短期間で編纂されたものであることがわかる（なお、三省堂百年記念事業委員会編『三省堂の百年』三省堂、一九八二年、四五～四九頁にも版権買収の件についての言及はある）。山田忠雄は『近代国語辞書の歩み―その摸倣と創意と―』上（三省堂、一九八一年）の中で、先の『辞書生活五十年史』を引きながら本書に言及しつつ、『帝国大辞典』と『日本大辞典』『言海』を比較し、「三十九年六月までに九版も行われたのは一に造本と活版の良さとによったものであろう。それ自体の創始は頗る少いが、前著の泥臭さを適宜修正した其の垢抜け

た表現と堂堂たる体裁はカットの挿入と相俟って十分に読書子を威圧した。一部の識者からは勿論盗竊を批判されながら、その内容は後来三省堂の国語辞書群を叢出せしめ、その体例は長く以降の国語辞書に踏襲された。日本大辞書　の功は、アクセント記載の件を除き、悉く此の書に奪われ　又この本によって後世に伝わることになった。」（六二七頁）と評している。なお、『帝国大辞典』の共編者として名が記されていた草野の事績については、草野清民『日本文法』（富山房、一九〇一年）所収の藤井乙男「草野文学士小伝」に詳しい。

(30) 岩城準太郎「藤井乙男先生の学殖と著作」（『国文学―解釈と鑑賞―』一六巻一二号、一九五一年一二月）。

(31) 藤井乙男編『諺語大辞典』（有朋堂、一九一〇年）。

(32) 武笠三は、埼玉県教育委員会編『埼玉人物事典』（埼玉県、一九九八年）七八二頁によれば、浦和・氷川女体神社の神官の家に生まれ、東京帝国大学文科大学卒業後は、第四高等学校、埼玉県第一中学校、第七高等学校を経て、明治三六（一九〇三）年に第七高等学校教授となった。明治四一（一九〇八）年には文部省に入り、大正一三（一九二四）年の退官まで国定教科書の編纂に従事し文部省歌の作詞を担当したという。ちなみに、大正五（一九一六）年には有朋堂から『国民乃歌』を編集刊行、以降も「有朋堂文庫」中のいくつかの巻に、校訂者としてその名がみており、『三浦理君追想録』（注一九前掲書）刊行の際にも藤井乙男と同様、追懐の文を寄せている。

(33) 日本図書館協会日本の参考図書編集委員会編『日本の参考図書：解説総覧』（日本図書館協会、一九八〇年）六四頁。

(34) 中野吉平『俚諺大辞典』（東方書院、一九三三年）。なお、中野吉平がこの辞典に関連して、藤井乙男から著作権侵害で訴えられたことについては、伊藤信男『著作権事件と著作権判例―側面より見た著作権発達史―』新訂増補版、著作権シリーズ第一〇集（文部省、一九六八年）五一～五三頁に言及があり、「辞典の著作権事件としては、私の知る限り、この「諺語大辞典」事件が唯一のもののようです。（昨四十二年に平凡社の大百科辞典収載の図画をめぐる事件がありましたが、それとこれとは性質を異にしています。）」と指摘されている。また、佃実夫・稲村徹元編『辞典の辞典』（文和書房、一九七五年）は『諺語大辞典』の項（六二頁）で、「『諺語大辞典』が〈語順配列〉で〈分類別索引〉を付けているのに対し、『俚諺大辞典』（中野吉平編、東方書院、昭和八年、絶版。復刻版＝国書刊行会、昭和四九年、一三〇〇〇円）では本文の各字の中を一四部門に分類し、〈語順索引〉を付けているので前書の単なる作り替えかと話題になったというが、独自の採取も多く三万余項目ある」と述べている。

(35) 塚本哲三「太く短かかった君の一生」（『三浦理君追想録』、注一九前掲書）三一六頁。